

「誇りは高く 夢はふかく われらここに集ふ」

この校歌のとおり、高い誇りを持ち、大きな夢を胸にして本校に入学し、共に切磋琢磨しながら三年間を過ごした 351 名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心から拍手を送り、お祝いを申し上げます。同じく、保護者の皆様には、衷心よりお喜びを申し上げます。

皆さんにとってのこの三年間は、他の誰か、や、これまでの何か、と引き比べることができない「心許ない」場面が多い歳月でした。我々の経験や既成の概念がいかにおぼつかないものであるかを、じわじわと感じながら過ごした、誰も予想しえなかったコロナとの日々でした。

そして、昨年度に続き、校歌の歌われない卒業式となりました。もちろん、県内高校ではみな同じ状況であります。ありますが、だから仕方がない、だからかまわない、というのは、少し違う感情が、私の中にはございます。

高校生活の内、二年間をコロナ禍の中で過ごし、全国一斉の臨時休業に始まり、登校時間に制限がかかることもありました。部活動では大会が中止になり、練習もままならない。二年連続取り止めたボートレース、無観客での運動会、一か月遅れになった明教祭、オンラインでの予餞会。

誰も悪くない、他人を憎んでも、何かに腹を立てても詮無いことだと頭ではわかっている。

でも、悔しいのです。

自分たちならできるのに、することが許されない。

自分たちは決して無力ではないのに、この世界的な感染症の前で大人しくすることを求められる。しかも、この閉塞感を打開しようと熱意に任せた行動を取ることは、感染リスクを高める愚かな行為とされる。納得がいかない世界の中で、こういった有象無象を受け入れていくことが、今の世に生きる私たちの宿命なのかもしれません。

この忸怩たる思いの中で、今の状況を客観的に認識しつつ、冷静になって高校生活を送ることには、正直難渋したと思います。

それでも、皆さんはやり遂げました。

よく我慢しました。よく頑張りました。自分たちの高校生活を輝かせようと、よく考え、協力しました。

哲学者の三木清さんが著書「人生論ノート」の中で、「旅」について記しているところがございます。「出発点が旅であるのではない、到着点が旅であるのでもない、旅は絶えず過程である。」と述べ、「人生そのものが実に旅なのである。」と結論づける中で「人はその人それぞれの旅をする。」、言い換えればその人それぞれの人生を歩むということにな

りますが、これについて「真に旅を味ひ得る人は真に自由な人である。涙することによって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。」との見解を綴られております。

人生そのものが旅であり、人生は常に^{プロセス}過程である。というこの主張には、二つの見方があると私は思います。一つには、まだ途中なんだから、過去のビハインドを取り戻して前向きになろうという姿勢。「あきらめない心」とでも申しましょう。

もう一つは、今起こっている嬉しいこと、悲しいこと、憤ろしいこと、冷徹な現実も、^{プロセス}過程の一部であり、嬉し涙も悲しみの涙も全て、自分の旅を彩り、自分に何かを教えたり、与えたりしてくれる、言わば貴重な体験であるという姿勢。「何事も人生の糧とする考え方」と申しましょう。

このどちらの見方も、当たっていると私は思います。他人事ではなく、同じ時代を生きている皆さんの同志として、私自身そう思うように努めよう、という思いがあります。

今日で高校生活は終わりますが、皆さんの人生という旅はまだまだ続きます。この三年間、私たちにできなかったことはあったかもしれないけれど、「三年間」が失われたわけではないのです。他の年代の高校生と同じ、三年という時間があって、もちろん望んだことではないけれど、他の世代の人たちにはない逆境の中で、考え、悩み、頑張った。皆さんしか経験し得なかった稀有な高校生活の中、学習や部活動、学校行事、そして大学受験に至るまで、皆さんの心の持ちよう、取り組む姿勢、そして情熱、困難を一つずつ打開する落ち着いた判断力を拝見して、本当に素晴らしい若者たちであるな、と感心しました。このような「あきらめない心」そして「何事も人生の糧とする考え方」を胸にして、さらなる高みを目指していただきたいと思います。

何か一つ目標を達成したとしても、そこがゴールではなかったという経験が、私自身にもあります。日本では一里塚、英語ではマイルストーンという言葉があります。いずれも旅の道のりを示す道標ではありますが、比喩的に人生の節目を意味します。皆さんの東高卒業も、長い旅の一つの節目です。これから続く旅路において、向上心を忘れず、強い意志を持って、自分が決めた道を、ゆっくりでいい、一つ一つの節目を堂々と進んでください。

最後に、この三年間ご苦労様でした。正門の横で皆さんの姿をずっと見守ってくれていた、安倍能成氏も、きっと「よく乗り越えた、随分偉かったなあ」とほめてくださると思います。そして本当におめでとうございませう。母校から更なる旅に向かわれる卒業生の皆さんの幸せを、そして、歴代の諸先輩方に劣らない、行く先での御活躍を心から期待して、式辞といたします。